
BLEACH in WONDERLAND

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L E A C H i n W O N D E R L A N D

【Nコード】

N 8 8 4 5 D

【作者名】

切香

【あらすじ】

遊園地に遊びに出かけた夏梨・遊子・ジン太・ウルルは、その場に突如現れた異空間に飲み込まれてしまう。調査に現れた日番谷・やちるを巻き込んで、脱出劇が始まる。アクション×ギャグ。

1. ゲタ男の誘惑

別連載「ありがとう」の続編です。

- - - - -

日番谷冬獅郎に、あたしが最期に会ったのは、一兄イチニイの部屋だった。
何者かに傷つけられ、気を失った冬獅郎を運び込んだのは、このあたし夏梨だ。

その後、目を放した隙にいなくなってしまった冬獅郎を、あたしはずっと心配してた。

アイツが死んだ、なんて思わない。大体アイツ、死神だしな。
でも・・・こちらからアイツに会いに行くことなんて出来ねえから、
もしかしたら、もう会えないのかもしれない・・・なんて。
そういう心配はしてたんだ。

だからって。

あんな場所で、あんな風に再会するなんて、さすがに夢にも思っ
てなかった。

「イよつつツツ、しゃアアア！」

浦原商店の奥の座敷で、ジン太は大きく拳を振り上げた。

「ジ、ジン太くん・・・声大きいよ」

至近距離で叫ばれて、耳をふさいだウルルが小声で文句を言った。

それだけの動作で、ジン太はバツ！とウルルを振り返った。

「お前、遊園地だぜ？旅行だぜ！落ち着けるわけねーだろ！」

「だからウルサイって」

あたしは横からツツコミを入れる。

「せつかくの春休み。いい思い出作ってきてください」

あたしとジン太、ウルルの前に座ってんのは、360度どこから見ても胡散臭い男、浦原喜助。

ていうか、部屋の中でくらい帽子取れ。

「どーです？夏梨サンも」

キラリ、と帽子の下から目が光った。

遊園地か、いいな。あたしは頭の中で考える。

随分行ってねえし。あのボケオヤジも、一兄も、文句言わなさそうだしな。

でも・・・

「なっ、なんなら、おめーの、妹連れてきてもいいぜ！名前は忘れたけどな！」

恥ずかしーヤツだよな、おめーは・・・

あたしは、ジン太の真っ赤になった顔を見返して、ため息をついた。

まあ、あたしが行く条件は、遊子も一緒にいくことだったしな。

ていうか、ジン太。てめーみたいな調子もんには、遊子はやらねえぞ。

それに・・・遊子が好きなのは、もっとクールで、頭良くて、つい

でにいうと銀髪だ。

「じゃ、決まりッスね。あたしが手配しますからん？」

「待てよゲタ男。あたしただけで行くのか？」

「子供たちだけのほうが、こういうのは楽しいッスよ」

「なんだよ夏梨、おめー、大人がいねえと、不安なのかよ？ガツキじゃねえの？」

ちよつと黙ったあたしを、すかさずジン太がからかう。

その発想がガキなんだよ。

大人がいねえと、面倒くさいことになるんだよ。

金とか？

「ホラ、言うでしょう。かわいい子には旅をさせよ！」

てめーは、ただ行くのが面倒くせえだけだろうが！あたしは心の中で突っ込みを入れた。

「ホラホラ、善は急げって言うでしょ。いつにします？」

いつになく積極的な浦原に乗せられた形だった。

日にちだけざっくり決めて、浦原商店を出てきたのは、まだ日も高いころ。

遊子に言ってやったら、絶対喜ぶぞ。

遊園地は、人が集まるから、霊もたくさん集まる。

そういう場で、霊を見まくるのはいい気持ちはしなかったけど・・・それでも。

ポカポカと温かい日差しの中で、あたしはガッツポーズした。
「よっしゃア！」

春。

こんないい天気なのに、家に閉じこもってるなんてつまらない。
思いつきりジェットコースターに乗りまくるのを想像するだけで、
ウキウキした。

こんな会話が、浦原と夜一サンの間でされてたとは、知る由もなく。

「夜一サン、ちょっと精霊廷に行つて、一報入れてくれませんか？
面倒なことが〇市の遊園地で起こってるから、死神よこしてくださいさ
いつて」

「は？お前、今子供たちを行かせたところじゃろ。大丈夫なのか？」
「大丈夫ツスよ、あの子たちは霊圧も強いし。初動部隊としては
悪くないツスよ」

「浦原・・・おぬしも悪よのう」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。言ったでしょ。かわいい子には旅
をさせよ、と」

2・三低の隊長格

「四楓院夜一から、一報が入った。現世に、異空間が出没したそうじゃ」

「異空間？」

隊首会の面子の顔が、一斉に引き締まる。

「異空間」。

それは、藍染たちが暗躍しだしてから、急に現れだした新現象。破面と関係はあるんだろうが、まだ、その全容は明らかになっていない。

「総隊長。それは・・・現世のどこに？」

浮竹の問いに、総隊長は重々しい口調で返した。

「ゆにばさる・すたじー・じゃぽん、じゃ」

「・・・」

一同の中を、微妙な空気が駆け抜けた。

なんだそれ。

絶対みんなそう思ってる。俺は一同の顔を見渡して、思った。

「あたし、知ってる！」

急に、能天気な声が聞こえて、俺たちはもれなく、期待してない視線を送った。

更木の肩からひょっこり顔を出してるのは、草鹿やちる。

最も身長が低く、知能指数も低く、常識度も低い・・・三低の隊長格。

三低、さんてー、さいてー、・・・と繋がるが、そこまでは本人には言えない。

「〇市にある遊園地で、大人気なんだよ！」

ためーが何で知ってんだ！俺はすかさず突っ込んだが、言葉にはしない。

めんどつくさいからだ。

「おお、草鹿か。よう知っておるな」

隊首会に、副隊長がもぐりこんでた事実にも憤ることも、恐らく気づくことすらなく、総隊長は目じりを下げている。

総隊長にとって見れば、草鹿は副隊長でも、おそらく死神でさえない。ただの「孫」だ。

「ねえ、そうたいちよう！あたし行きたい！」

その場の空気が、ハッ、と緊張する。

誰も、「異空間」なるものが何なのか把握していない中で、調査も兼ねることになる。

草鹿やちるが加わった時点で、難易度は飛躍的に増している。

「そうじゃな。1人で行かせるわけにはいかん。それなら・・・」

一同は、とっさに視線を、あさつての方向に逸らした。

俺も、今日の晩飯なんだろう・・・とあえて無関係なことを考えつつ、それとなく一同の様子を伺った。

ジェットコースターで吐血し、救護室に運ばれる浮竹。

女を口説きまくり、痴漢の罪状でカスタマーセンターに連行される京楽。

着ぐるみと勘違いされ、子供たちが群がる狛村。
実験体を物色する涅。

ハイジャック犯と間違われる更木。

ダメだ、現世に迷惑かけそうな奴等しかいねえ。

俺は、視線を朽木、砂蜂に向けた。

メリーゴーランドに揺られる朽木。

ジェットコースターに乗り両手を上げる砂蜂。

・・・子供たちが泣きそうだ。

なんで隊長格には、現世に役立たなさそうな奴が、こんなに多いんだろう。

そうだ。卯ノ花だ。

卯ノ花なら、草鹿の母親役って感じでいいかもしれねえ。

俺は、期待をこめて卯ノ花を見る。

卯ノ花も俺を見ている。にっこりとした笑顔で待て。

笑顔つてのは、そんな風に、相手の目をじーっと見るもんじゃねえ。まるで、ガンつけるみてえに。

行ってくださいな。

ふっ、と耳元に声が聞こえたような気がした。

天廷空羅。

相手の位置を一瞬にして捕捉し、相手だけに言葉を伝える縛道の種類だ、が。

・・・こんな時に、こんな風に使うのか、この技は？

俺は、もう一度卯ノ花の、全く笑ってない『笑顔』を見返す。

イヤなのか。

イヤなんだな。

俺は、逡巡し、狼狽し、憤った後で・・・脱力した。
みな視線が、俺の前で止まったからだ。

「それでは日番谷隊長、草鹿副隊長と共に、現世へと赴いてくれ」
「ひつつーん！よろしく！」
うるせえ！

言う気力もねえ。俺はがつくりと首を前に垂れた。

3・遊園地、突入！

「おおお、テレビで見たのと同じだ！」

あたしたち・・・ジン太、ウルル、遊子、そしてあたしの4人は、パーク内に入った途端、パンフレットとかテレビで見たのと同じ、地球儀のミニメントに感動した。

財布には金。時間もたつぷりある。目の前には遊園地。

あたし達は歓声をあげて、外国っぽく作られた街並みに駆け込み・

・
「まずジェットコースターだろ！」

「あたし、おなかすいた・・・」

「動物の芸があるんだって！あたし見たい！」

早速、仲間割れした。

「なあ、お前さ」

あたしは、ジェットコースターの、カチ、カチ、カチ・・・という
発射直前の音を聞きながら、前に座るジン太を見た。

「大丈夫かよ」

「なななに言つてんだ、大丈夫に決まってる！」

振り返って親指を立ててみせるジン太。

それが震えている、ということをつつまないのは、武士の情けだ。

苦手なんだつたら、なんで一言目にジェットコースター乗りたいな
んていうんだよ・・・

「このまま乗つても退屈だからさ、なにかゲームしようよ！」
空気の読めない女、遊子。

こいつは、ジェットコースターはあまり好きじゃない。
怖いからじゃない。・・・退屈だから。

こいつが案外、将来黒い女になるかも・・・と思うのは、こういう時だ。

「えーと、もちろん写真は撮るでしょ？それから・・・シリトリしない？」

「シリトリ？」

ウルルがポカンとする。

普段はメルヘンな感じもする遊びだが、ジェットコースターに乗りながら、となると趣がかなり違うな。

「よし、あたしが最初ね！時計回りだよ！」

カチ、という最後の音が止まる。

「よし、行くよ！」360度回転はあるか？」

「う・・・おおお！！！」

遊子の言葉に、ジン太の悲鳴が重なる。

出だしから凄まじい勢いで、ジェットコースターが一気に上昇したからだ。

「か？か・・・カツラも飛ぶ！」

「ぶ・・・文鎮」

文鎮？あたしの後に言ったウルルの横顔を、あたしは見つめた。
いつもと全然かわらねえ！

「ん」がついたから終わり！ジン太、次いけ！」

「し、しぬううう！」

「う、ね！」

遊子。やっぱり空気読めてない。

ジェットコースターは、街中を走りぬけ、アトラクションの間を通り、一気に空中に向けて加速していく。

「はい、チーズ！」

ふわり、と体が浮いた瞬間。あたしは、隠し持ってた携帯のカメラで写真を撮った。

「ひゃっほー！！」

爽快！やっぱり遊園地はジェットコースターに乗らなきゃ。

ジェットコースターを降りて、写真をチェックしたあたしは、思わず噴出した。

満面の笑みで、両手をあげて乗っている遊子。

その横で、魂が口から飛び出したような顔してるのが、ジン太。

その後ろで、浦原商店の前をホウキで掃いてるのと、全く同じ表情のウルル。

ひとしきり大笑いした後（ジン太はのぞく）、ウルルがポツリと言った。

「ね。ジェットコースターの先のところに、黒いものが見えない？」

「え・・・ええ？ユーレイ？あたしそいういの、苦手！」

遊子が大声を出して、写真から離れる。

対照的に、

「どれどれ、何だよ？」

元気を取り戻したのはジン太だ。

あたしとジン太が覗き込むと・・・ジェットコースターの一番前の席よりも前に、黒い影が見えた。

「これ・・・人じゃねえか？」

小柄な子供みたいに見える。頭の色が、ピンク色だ。黒い服を着ているが、これは、まるで・・・あたしとジン太は顔を見合わせた。

「これ、死神の服に似てないか？」

ウン、とあたしは頷いた。

よく見れば、服というより、それは和風の着物だ。黒い袖が閃いているのが見える。

そして、穿いている袴らしきものの色も、真っ黒。

「ジン太、ウルル。死神見れるよな？」

「決まってるだろ」

あたしの問いに、ジン太がすぐに返す。ウルルもコクリと頷いた。

「見つけてもし、死神だったら。声かけてくれないか」

「なんでだよ」

「冬獅郎のこと、聞きたいんだ」

「だから、なんでだよ」

途端にジン太が、面倒くさそうな声を出した。

「死神つつたって、大勢いるんだぜ？知るわけねえよ。」

知ってたとしても、俺達に教えると思うか？」

そりゃ・・・そうだ。あたしは軽くうつむく。

でもここで、通りすがりの他人に一兄のことを聞くのに比べれば、的外れじゃないだろう。

だってアイツは死神の中でも「隊長」だ。

きっと、名前は知れ渡ってると思う。

でも、隊長のことだからこそ、あたしたちなんかの質問に答えてくれるとは、確かに思えなかった。

「最後に会ったとき。アイツ、大怪我してたんだ」
ポツリ、とあたしは呟いた。

「それなのに出て行っちゃまって・・・せめて、今元気にやってるのとだけでも確かめたいんだ」

死んだ、なんて思わない。

でも、最後にあいつに会った時のシチュエーションがまずすぎだ、とあたしは思う。

倒れたあいつを助け起こしたとき、あたしの手のひらは、血で真っ赤に染まった。

冬獅郎を背負って、こっちも倒れそうになりながら、家に向かった長い長い道。

その血の色、あたしが乗せた濡れタオルの下で、目を閉じたあいつの白い顔。

動けるはずのない重傷なのに、冬獅郎はあたしが眠っているスキに、窓から姿を消した。

ふとした時・・・下校途中で、寝る前に、朝起きたとき。

喉の奥に詰まって取れない魚の骨みたいに、気になってしょうがないんだ。

「・・・アイツがそう簡単に死ぬわけあるかよ！」

ジン太は、しばらく黙ってたが、手を振った。

「今頃だって、どっかでシレッとした顔で、茶でも飲んでるに決まってるんだ」

4・日番谷とやちる

「お客様、お待たせいたしました。カフェラテとなります」
「ああ」

俺は、ウエイトレスから、カフェラテが並々と注がれたカップを受け取っていた。

オープンカフェの椅子に背中を預ければ、青く晴れた空が見えた。組んだジーンズの足の向こうには、家族連れやら恋人たちやが見える。

俺は、笑顔を浮かべた、ウエイトレスの顔を見上げた。

「もう、やらなくていいぞ」

ヒュッ、と軽い音を立てて、その額に、斬魂刀の柄尻を押し付ける。周囲の注意の間を縫ったその動作は、誰の目にも留まらなかった。ふわり、とそのウエイトレスが微笑み・・・その姿が、スウッと空に、溶ける。

さすが、人の魂が集まる遊園地には、霊が多いな・・・
人が集まるところには、霊も集まりやすい。

死んでも尚、人に引き寄せられるのは、人間の性さがなのかもしれない。
一口、温かい液体を口に含むと、俺は周囲を見渡した。

「キヤーー!!」

目の上を、ジェットコースターが走り抜けてゆく。

キヤーキヤー言うならなんで乗るんだ。全然わからん。

「そんななんばっかり飲んでたら、背、伸びないよ」

後ろから声をかけられ、俺は振り返った。

「放つとけ」

誰の趣味なのか、草鹿は春らしい花柄のワンピースを着ている。わざわざ言ってはやらないが、ピンクの髪に、よく似合ってる。案外斑目のチョイスかもしれない、と俺はチラリと思った。頭に、何だかキャラクターものの耳みたいなものをつけている。

「オイ、お前、俺がやった金で、それを買ったりしてねえだろうな？」

「ウン、買ったよ。あと、コレ買ったらなくなっちゃった」

俺は、草鹿から差し出された、チュロスと赤い飲み物を受け取った。いらねえ、と手を振ろうとしたが、ズイ、と俺の前に突きつけて動かないもんだから、しょうがなく受け取った。

全く、残った金を人のために使っちゃうやつだよ、こいつは。

俺はチュロスを半分に割り、半分を草鹿に渡した。

俺が手渡したカフェラテを、草鹿は頬に満面の笑みを浮かべて飲み干した。

口をもぐもぐさせているその顔は、頬袋でもついてそうに膨ふくらんでいる。

「ひつつん、別におつきくならなくたっていいよ」

まだ引く張るか、その話題を。

俺の顔はムスツとしてた自信があるが、草鹿はテーブルに頬杖を着いて俺を見て、笑った。

「ひつつん今のままで十分カッコイイもん。」

ひつつんが、あたしのお兄ちゃんだったら良かったのに！

俺は、一瞬ポカンとしたんだと思う。

「あ！ひつつんが笑った！」

「呆れたんだよ」

そういつて俺は、なぜか嬉しそうな草鹿から、視線を逸^そらした。

「十番隊隊長・日番谷冬獅郎」でいる時には、笑ったことがほとんど無いと思う。

俺は、自分の笑ってる顔は嫌いだ。ガキッぱいから。

特に、藍染達の反乱の後は、笑い事じゃないことばかりだからな。でも、どうもコイツといると、調子が狂う。

調子が・・・

「で、剣ちゃんがお父さんなの！」

俺は、口に含んでいた飲み物を噴出しそうになった。

「なんでむせるの？剣ちゃんもひつつんも髪上げてるし、おそろいじゃん」

草鹿は恐ろしいことをさりと云った。

仮に、他のヤツにもお揃いだと思われてるなら、俺は明日から髪を下ろす。

「剣ちゃんにも言ったら、喜ぶと思うな」

「言わんでいい」

俺はバツサリと草鹿の言葉を斬り捨てた。

そして、底に残っていた、赤い飲み物を最後までグイッと飲み干す。一体何が入ってるのか、やたらに苦い。お世辞にも旨いとはいえない。

「なんか、イヤな感じがするよ」

不意に、草鹿がそう言った。

遊園地内を見回す草鹿の横顔に、もう笑顔は無い。

「遊園地中見てて、思ったの。なんか・・・全体が、嫌な感じにな

ってる」

具体的に、どこがおかしいのか、と草鹿に問いかけても無駄だ。でも、こいつの「予感」は、信用に値すると俺は思ってた。

異空間が出現するか・・・

俺は、伝令神機をジーンズのポケットから取り出した。涅から届いたメッセージにさっと目を通す。

まだ、全容は明らかじゃないヨ。

でも、現実の世界と全く瓜二つの「双子の空間」が出現するのは間違いないらしいネ。

霊圧が高ければその中に引つ張り込まれ、出て来なくなる可能性もあるらしいから、せいぜい気をつけるがいいサ。

もしも出てこられたら、土産はE・の人形焼なら受け取ってやらんでもないヨ。

だまれ。

俺は、パシツと音を立てて、伝令神機のフタを閉じた。

「草鹿。霊圧の高い奴は、この中にいたか？」

ウン、と草鹿はすぐに頷いた。

「死神くらい、霊圧が高い子もいたよ」

「死神レベル？」

俺は思わず、周囲の人間達を見回した。どいつもこいつも、霊圧はボンクラだが・・・

「草鹿。そいつらを探し出して、この遊園地から出させる。

どんな手を使ってもいい。巻き込まれたら厄介だからな」

「あい！行ってくる」

草鹿は機敏に立ち上がると、こめかみのところに伸ばした手を翳した。た。

松本より使えるかもしれない。
それを見て俺は思う。俺の目を盗んでサボろうとしないだけ、松本より十倍マシだ。

俺も立ち上がろうとして・・・ふらりとよろめき、手のひらをテーブルについた。

さっ、とイヤな予感が胸をよぎる。

胸がムカムカして、顔が熱くて、足元がふらつくものという・・・

「草鹿っ！」

俺は、背中を向けようとしていた草鹿に怒鳴った。

「さっきの赤い飲み物なんだ？」

「えと、ラズベリービール、だって」

前言撤回・・・！

「バカヤロー、それは酒だ！俺は酒は飲めねんだよ！」

俺は怒鳴ったが、そのときには草鹿の姿は影も形もなかった。

- - - - -

追記。

ラズベリービールは、このモデルになった遊園地に、ちゃんと売ってます（2008年は）
まずかった。

5・真つ逆さまの出会い

メルヘンチックな小人が踊る岸边や、エキゾチックな景色の中を、水音と共に舟は進んでゆく。

景色が変わるたび、舟に満杯に乗り込んだ客から、一斉に悲鳴と笑い声が起こった。

「きゃー、もうすぐだね！」

舟の先頭に、ジン太と並んで座った遊子は、その瞬間が待ちきれないみたいに、周りを見回している。

今のところ、風景はファンタジーそのもの。

でも、何の前触れもなく急に、舟ごと上に持ち上げられ、ドバーン、水の中を10メートル近く落下する。

そんなアトラクションだとパンフレットには書いてあった。

90分待ちでもどうしても乗りたい！と騒ぐ遊子に、かつこよく頷いたまでは良かったが・・・

「なあ、お前さ。・・・なーってば」

あたしは、前に座るジン太に声をかけた。

両肩が、上がってる。明らかに全身こわばってる。

「もうやめとけよ。お前がジェットコースター弱いのもう十分・・・」

「ぎゃー！！！」

途端に、ジン太が大声を上げた。

ほんのちよつと、下に落ちただけだろうが！！

「来る、来る来る来る！」

「来るねー」

なんで同じものを前にして、ここまでジン太と遊子はテンションが違うんだろう。

そう思ったとき、前がいきなり暗くなった。

顔を上げると、あたし達の体くらいある、でかい頭蓋骨ずがいつのレプリカが、すごい勢いで落ちてきた。

「キヤー!!」

悲鳴があがる船の上。

ジン太は両肩をビクリと上げたまま、動かない。そろそろアワ吹いてるかもしれない。

頭骸骨は、ピタリとあたし達の頭上2メートルくらいのところで、止まった。

「よくできてんなー・・・」

さすがにビックリしたあたしが、その頭蓋骨を見上げたとき・・・

「あ」

まるで店番してる時みたいに、ぼーっとしていたウルルが、急に声をあげた。

それは、隣にいるあたしにしか聞こえないくらい、小さな声だった。ウルルの視線の先、頭蓋骨の頭の上を、あたしは何気なく見やり・・・

「あー!!」

思わず、大声を上げた。

頭蓋骨の上に、ぶらぶらと揺れる草履ぞうりの裏が見えた。

背中をのけぞらせると、黒い袴の裾がパタパタと揺れ、その上にピンク色の頭が乗っているのが見えた。

あれは・・・

「死神!？」

あたしは、思わず大きな声で叫んだ。

あたしの声に、その小さな頭が、あたしを覗き込んだ。^{のぞ}

かわいい子だな・・・

ぷつくりと笑窪^{えくぼ}が出来た頬。肩のあたりでぴよんとはねた髪。

6歳か、7歳くらいにしか見えない、あたし達よりも随分^{ずいぶん}小さな背丈。

「あたしが死神だつて分かるんだ! きやはっ、見つけた!」

その子は、あたし達4人を見て、全員が自分を見ていることに気づくと、ぱーつと笑みを浮かべた。

そして、ぴよん、と頭蓋骨から飛び降り、あたし達の眼前に着地した。

「あああんだ、やっぱり死神なの?」

「うん、あたし、草鹿やちる!」

あたしは、とつさに返す言葉を失って、まじまじとその子の顔を見返した。

死神って・・・何かこう、みんなのオトモダチみたいなんじゃないかって。

顔を見たら死んじゃう、みたいなメドウスアミたいなのを想像するんだけど。

冬獅郎といい、この子といい、何か調子狂うな。

まあ、一兄が死神やつてる時点で、言わずもがななんだが。

そう思ったとき、急にあたりが真っ暗になり、あたしは我に返った。そして、いきなり舟の先が、上を指す。

そのまま、少しずつ上に、上にと運ばれてゆく。
あ！そうだ！！我に返ったついでに思い出した。
あたしは、思わず、その子のほうに身を乗り出した。

「なあ、教えてくれ！日番谷冬獅郎、て知ってるか？」
「ひつつん？」

やちるちゃん、と名乗ったその子は、あたしの言葉に、首をカクンと横にかしげた。

「ひつつんなら、びーる飲んで酔っ払って寝てるよ」
はっ？

「酔っ払ってんの？」

「うん」

「で、寝てんの？」

「うん」

あいつ・・・！

あたしが心配してやってんのに、どんな荒んだ生活送ってた！
喉につかえた何かがストンと落ちた途端、むかむかした気持ちから腹からせりあがってきた。

「あんのやろう、今どこに・・・」

「ひつつんなら・・・」

「それどころじゃねえ！それどころじゃねえって」

ジン太のわめき声が、やちる、という女の子の声を遮った。

「ええっ、やちる・・・ちゃん、日番谷くんのこと知ってるの？」
真っ暗闇の中、コーフンした遊子の声が割ってはいる。

「うん！」

「だからお前ら、それどころじゃ・・・」

ジン太の裏返った声。

突然、舟の上昇が止まった。と思ったとき・・・

「うおおお！」

「きゃー！」

突然現れた死神に視線が集中してた分、完全に不意をつかれた。

パツ、と急に視界が広がり・・・あたしたちは、滝の中を、まっさかさまに、落ちた。

6・脱出不能のワンダーランド

「きゃははは！」

水しぶきの中で、やちるちゃんが声をたてはしゃぐのが聞こえた。頭を押さえる時間もなく、あたし達は頭から水しぶきを浴びる。

「うつわ、びしょぬれ・・・」

髪の水滴を払い、後ろにのけぞったまま放心してるジン太を起こし、振り返ったあたしは。

「・・・え？」

無意識に、ぴたりと動きを止めた。頭の動きも、同時に止まってた自信ある。

「なんで？」

ウルルも、事態を飲み込めない顔であたりを見回してる。

無理もねえ・・・

舟が下に落ちる瞬間の、一斉にあがった悲鳴がまだ耳に残ってるって言うのに。

あたしたちの後ろには、誰も乗ってなかった。

ただ、水に濡れた空席が見えるばかり。

「ドキドキ、ワクワクの旅はどうでしたか？」

その時、ヒトの声が聞こえて、あたしは慌てながらも、ホッとした。

「なんだよ、一瞬、誰もいなくなっちゃったかと思ったぜ」

それは、ワンダーランドの中とは言え、タチの悪すぎる冗談だ。

舟は、そのまま水面を緩やかにすべり、スタート地点に戻ってゆく。

そこには、いまや120分待ちになった列が出来ているはずだった。でも・・・現れた景色は、あたしたちの淡い期待を、あっさりと打ち砕いた。

「おつかれさまでした！」

その、声が。上に取り付けられた、マイクから聞こえてきた。・・・自動音声なんだろうな、これは。

そのときには、遊子の体が、カタカタと震えだしていた。あたしは、動揺してるのを何かに隠すように、怒鳴った。

「なんで。なんで・・・誰もいないんだよ！」

120分待ちの列も。

メガホン片手に客を案内してたバイトのヒトも、列の最後尾の札を持っていたヒトも、みんないなくなってる。

誰一人いない、列の誘導ロープの中に、ぽつんと最後尾の札が置かれてるのが・・・

なんか、とてつもないイヤミな嫌がらせに見えた。

ここ、どこなんだ・・・

初めて、そう思った。

「夏梨・・・ちゃん」

「・・・とりあえず、出ようぜ」

意外にも、一番先に冷静さを取り戻したのは、ジン太だった。

まあ、コイツにしてみたら、オカルトな今の状況も、ジェットコースター真つ逆さまな状況に比べればマシなのかもしれない。

「異空間、できちゃったみたいだね」

すぐ傍で聞こえた声に、あたしたちはバツ！と振り返る。

その瞬間、やちるちゃん存在をすっかり忘れてたからだ。

さすがにニコニコって訳にはいかないけど、それでも、口元には笑みが残ってる。

それは、迷路に迷い込んだみたいなたたしを、少しだけ落ち着かせた。

舟が陸につき、勝手に安全ベルトが上がる。

「お前の仕業か？」

ジン太が、栈橋に上がりながら、舟のやちるちゃんを見返した。

「うっん、違うよ」

タンツ、と軽い動きで、やちるちゃんは舟の端を蹴って、栈橋にくるりと下りた。

舟もほとんど揺れてない。おそろしく体重が軽いんだろう。

「どうやってら・・・出られるの？」

伏目がちにやちるちゃんに歩み寄ったウルルが、そう尋ねた。

それに答えようとした、やちるちゃんの視線が、ウルルの背後に注がれる。

？

その視線の先を追ったウルルの視線が、固まる。

「あ・・・あれは！」

やちるちゃんの声が、ウルルに重なった。

「まぼろしの、蜂蜜キャラメルがけポップコーン！」

それは、口に入れば歯にくっつき、口も開けられなくなると噂のポップコーン。

さらに、食べ終わったあと手を握ると、あまりのベタベタのために手が開かなくなるという噂もある、悪評高い菓子。

・・・しかし、トゲのあるものには毒がある、という言葉通り（ちよつと違うか？）、旨い。

だからって。

いきなり、この状況下で、しかも無人の屋台に、走りよるか？普通。

「バカたれ！勝手に食うなよ！」

我に返ったあたしは、屋台に駆け寄った。

凶暴なまでの甘いニオイに、甘い系があんまり得意じゃないあたしは、引いた。

「おいっしーよー!!」

「でも・・・誰も売ってるヒトいないし・・・」
そういう問題じゃねえだろ！

罪悪感のかけらも無いやちるちゃんには、まあ死神だからいいとして。

ウルル、オズオズしながら言う台詞じゃねえ。

「その余裕・・・お前、ここから出る方法知ってんだろ！」

期待70%、不安30%くらいの口調で、ジン太がやちるちゃんに歩み寄った。

やちるちゃんは、死神には頬袋があるんだろうか、と思わせるくらい、頬つぺたにポップコーンを詰め込みながら、首を振った。

「うー、まぶりんがべー」

「ちゃんと喋れ！」

焦るジン太がバカっぽく見えるほど、やちるちゃんのはのんびりしてる。

「まゆりんが、ねえ」

ごくり、とポップコーンを飲み込んで、やっと口を開いた。

「知らないって」

「まじかよ・・・」

まゆりんが何者かなんて、この際どうだっていい。

あたしとジン太は、笑顔のやちるちゃんを前に、がっくりと肩を落した。

7．そして銃弾は放たれた

「まゆりんって誰だ！しかも分からねえって何だオイ！」

これ以上聞いても無駄だ、と悟ったんだろう。がつくり肩を落したジン太の腕を、遊子がそつと引つ張った。

「な、なんだよ」

途端に体を強ばらせるジン太。

ていうか、こんな状況なのに分かりやすいヤツだな、ほんとに。

「ねー。あのアトラクション、今なら並ばずに乗れるよ」

こいつも、基本的な発想はウルルたちと同じなのか・・・

遊子が指さしたのは、巨大な鉄色の柵で囲まれた、巨大な建物。

あの中には、確か水でびしょ濡れになるので有名な、人気アトラクション「Water Wonderland」があるんだった。

確か、海面上昇で海だらけになった地球が舞台で、幻となった陸地をめぐる、スタントマンの度派手なアクションが見れるはずだった。確かにヒトは並んでねえかも知れねえが、この調子じゃスタントマンもいねえぞ。

ここにはもう、誰も・・・

そう思ったとき、あたしはピタリと動きを止めた。

ぞわり、と腕と背中あたりの産毛が、一斉に逆立つのが分かったから。

何だ？

ヘタに騒いじゃダメだ、と思うくらいの自制心はあった。

今パニックになってないことさえ（ある意味、みんな混乱してるかも知れねえが）、不思議なくらいなんだ。

「オイ。お前食べすぎだろ」

ジン太が、ウルルに向かって言う声が、何だか壁の向こうみたいに遠く聞こえた。

「だって」

ウルルは、もぞもぞした声で言いながら、指先を舐^なめている。

「腹が減っては戦はできぬって言うよ」

そうそう。戦は出来ねえよな。

戦・・・？

あたしはウルルを凝視した。

もぞもぞ、とした動きで、ウルルは背中^{うしろ}に手を入れて・・・取り出したのは、お得意のガトリング砲。

ていうか、どうやったらそんなもんが入るんだ！

「ちょ・・・」

「後ろ、行きます！」

口だけは律儀に、行動は思いっきり乱暴に。

ウルルはガトリング砲をあたしの方^{あたし}に向けると、思いっきりぶっ放した。

ダダダダ！！

機関銃のような炸裂音に、あたしはとっさに遊子に飛びつき、頭をかがめさせた。

立ち上る砂煙、噴煙、火の粉。

周りを心配させまい、と黙ってたあたしの立場はどうなんだ？

「ウルル！何をいきなり・・・」

あたしの言葉は、あたしたちの背後を見ると同時に、断ち切られた。ガトリング砲の連打を受け、ヒトであるはずがないほど巨大な影が、

スツと消えるのが見えたから。

ホロウ
「虚か！」

あたしは遊子を抱えながら、ウルルとジン太に近寄った。

あの、蛇に首筋を舐められるような、気味悪さと恐怖が混じった感覚。

あの感覚をおぼえた時点でほんとは、虚だと半ば分かっていた。

「氣いつける！」

ジン太が、自慢のバットを空振りするのが見えた。

どこから出したのか、なんて最早聞くまい。

その瞬間、視界が、さっと暗くなる。

嫌な予感が足から背中に駆け上がる。

あたしが顔をあげるよりも早く、

「あぶねえ！」

ジン太があたしを突き飛ばした。

突き飛ばされる前に立っていた場所に、ズン、と馬鹿でかい足が置かれた。

灰色の毛が生え、巨大な爪は、刃物のようにとがっている。

獣みたいな二オイが、辺りに一気に充満した。

見上げたその獣の胸には、ぽっかりと穴が空いていた。

「大物だぞ！」

ジン太が怒鳴った。

その虚の体長は6・7メートルで、ヒトというより、灰色の毛と、1メートル近い爪を持つ獣みたいに見えた。

カッと開けた赤い口から、ギラギラ光る牙がのぞいた。

「あっちにも！バケモノがいるよー！！」

遊子が、震える声で叫んだ。

そっちを見ると、一瞬にして巨大な虚が現れ、ドシッ、と音を立ててこちらに歩み寄るのが見えた。

どいつもこいつも、狙ったみたいにこっちに向かってくる。

10体近い虚の足音で、地面が地震みたいに揺れた。

「どうする！ 数が多すぎるぜ」

「数が多いんだったら、一体ずつやるしかねーだろ！」

「夏梨！ おめーは遊子つれて、安全なところへ逃げろ！」

悔しいけど、確かにあたしの虚を倒す力は、この2人に比べたら弱い。

その時あたしは、目の前に立つ黒い小さな影が、ゆっくりと十数体が増えた虚に歩み寄るのが見えた。

8・海へダイブはまだ早い

「あ！あんた！逃げなきゃ・・・！」

「だいじょーぶだよ」

あたしの声に、やちるちゃんは振り返って、ニツコリと笑った。

この土壇場での笑顔は、単に無邪気だってこと以上に、慣れとか余裕を感じさせた。

「どっか、建物の中に逃げ込んだ方がいーよ。ここだと目立つちゃうし」

「お前、任せて大丈夫なのか？」

「あつたりまえだよ」

ジン太の声に、やちるちゃんは平然として、そう返した。

ジン太はそんな、やちるちゃんの顔をじっと見ていたが、やがて身を翻した。

「どっか、逃げ込むぞ！」

「え、あ、おい！」

「いいから！」

言い返すヒマもなく、ジン太はあたしと遊子の腕を掴み、虚から離れて走り出した。

そして、さつき遊子が指差した建物・・・「Water World
erland」の入場口から、中に駆け込んだ。

入場待ちのロープが張られた場所を突っ切り、ゲートを越え、階段を一足飛びに上がると・・・

劇場式に段差になった観客席の中央に、「水上要塞」のレプリカが見えた。

古びた栈橋の先に梯子があり、登った先に、海から攻めてくる敵用

の見張り台や通路が作られている。

水上要塞が浮かんだプールには、人がいれば乗っていただろう、水上バイクが浮いていた。

「時は未来、温暖化による海面上昇で、地球の陸地はほぼ水没してしまった！

陸地を探し続ける水上要塞のメンバーはついに、土を発見した！

しかし、土を狙う他の勢力に、基地の場所をかぎつけられてしまい・・・！」

ここでも、ナレーションだけが、気合たっぷり流されている。

こんな場面・・・水に浮かんだ、「水上要塞」にも、それを取り囲む観客席にも、人っ子一人いない、という場面でなければ、きっとワクワクしたに違いねえ。

「オイ、あの子一人で置いて・・・」

「聞いたことあるんだ、夜一さんに」

ジン太は、ゼエゼエと喘ぎながら、あたしを見た。

「精霊廷の隊長格には、俺達よりも外見年齢は下のやつが2人いる。1人は日番谷冬獅郎。2人目は、ピンクの髪の子なんだってよ。ピンクの・・・髪？」

「それって、さっきの・・・」

「あんな髪の色のがキ死神が、そうそういるかよ！」

そうジン太が叫んだとき、外が大きなフラッシュを焚いたみたいな、まばゆい光に包まれた。

「なんだ・・・」

あたしは壁に駆け寄り、隙間から外をうかがった。

「虚が、いなくなってる・・・？」

どんな手品なのか。十匹以上いた虚は、嘘みたいに消えうせてた。そして、地面の向こうに、小さく、小さくやちるちゃんの背中が見

えた。

「もう、大丈夫、なの？」

緊張の糸が切れたかのように、力が抜けた声で遊子が言った。

「イヤ」

ジン太が、素早い動きで振り返った。

慌ててそちらに目をやった瞬間、壁がぶち破られた。

「グオオオ！」

野蛮な叫びと同時に、鋭い爪がギリリと光りながら、あたしたちに打ち下ろされた。

「つくしょー！」

まけじ、とジン太が叫ぶと、バットを振りかぶり、その爪に向かって打ちつける。

ギイン！

耳をふさぎなくなるみたいな音が響いて、バットと爪が交差して・
・虚が下がった。

これも、人型というよりは、獣に近い体系をしてる。

「どうやら俺達は、虚の巣に迷い込んだみたいだぜ」

バットを虚に向かって構えたまま、ジン太が言った。

「排除します」

その後ろで、ウルルがガトリング砲を構えた。

「遊子！逃げるぞ」

あたしは、立ちすくむ遊子の腕を取ると、水上要塞のレプリカに向かって駆けた。

あの桟橋の向こうの梯子をあがれば、隠れられそうところがいっぱいあったからだ。が・・・

「危ねえ、戻れ！」

あたしたちが桟橋に乗り移ったのを肩越しに見たジン太が、大声で

あたしたちを呼び止めた。

「何・・・」

聞くまでもなかった。

水上要塞が浮かぶ、プールの底から・・・突如、10メートルはある虚が、しぶきを飛ばしながら現れたからだ。

「なんだよ！計算あわねー！！」

プールがどれだけ深くても、数メートルだろ。なんで10メートルの虚が出て来るんだよ！

あたしたちは頭からしぶきを浴びて、水上要塞から慌てて飛びのくとした。

「このアトラクションは、少し、いえかなり、濡れることがあります！」

狙ったかのようにナレーションが入り、あたしはこんな場面だけど、ちよつと呆れた。

「きゃ・・・」

栈橋を後ろ向きに下がった遊子の足が、空を切る。

「遊子！」

あたしは、足を踏み外して栈橋から落ちた遊子を見て、慌てて駆け寄った。

「いったーい！」

栈橋の端に立って見下ろすと、遊子は下にあった水上バイクにかろうじてつかまっていた。

ほつとしたのもつかの間。

「なんか、これ、エンジンがかつてるよー！！」

「切れ、切れー！！」

「どうやったら切れるのー！！」

聞かれたって、あたしだって水上バイクを間近で見たの初めてだし。

勝手にエンジンが唸り、今にも勝手に走り出さんと、バイクの先が水上から持ち上がった。

「ええい！」

バイクが水上を駆け出すと、ほぼ同時。あたしはとっさに、水上バイクの上に飛び降りた。

それとほぼ同時に、バイクが水面から弾むように暴走しだした。

「な！何やってんだ、てめえらぁ！」

ジン太が泡食って怒鳴ったが、あたし達だって好きでやってる訳じやねえ！

「あたる、あたる！！」

水上要塞って言うても、プールに浮かんだレブリカだから、水上バイクが走り回るスぺースなんて、ほとんどない。

バイクの先は、まっすぐに要塞の先の壁を差してた。

これ以上いけば、壁を突き破っちまう。

あたしは、必死でハンドルを取って、方向転換しようとしたが、ハンドルが固すぎて曲がらねえ！

「やば・・・！」

あたしは、壁にぶち当たる瞬間、ハンドルを片手で握り締めたまま、下にしゃがみこんだ遊子の上に覆いかぶさった。

次の瞬間あたしたちを襲ったのは、体が跳ね上がるような衝撃と、壁が破られる、バキバキ言う音。飛び散る破片。

その後、あたしたちはパークのどこかに、水上バイクごと、投げ出されるはずだった。

下は、アスファルトかコンクリートだろうから、このスピードで叩きつけられたら・・・

・・・？

あたしは、いつまでたっても、バイクが走り続けているのに気づいて、おそろおそろ目を開けた。
そしてハンドルを支えに立ち上がって・・・文字通り、クラクラした。

プールの中、だったはず。なのに、今日の前にあるのは、どこまでも広がる海だった。

9・ハイテンションVSローテンション

ただだ、とスニーカーの足が、アスファルトを撥ね返し、駆けぬける。

「この霊圧。間違いないんだ。アイツもこの近くにいる・・・！」
なのに、全く動かねえ。なんでだ？そう思ったとき、目の前がフツと暗くなる。

何か考えるヒマもねえ。その場から吹っ飛ぶみてえにして離れる。
次の瞬間、俺がいた地面を、巨大な足が踏みつけた。

「てめー！」

ダン、と地を蹴って、思い切り足の甲に向けて、バットを打ち下ろしてやる。

ドッ、と鈍い音がして、虚は足を押さえて飛び上がった。

人間だったら、イッテッテ、くれえ言ってそうだ・・・けど、悔しいけど、その程度だ。

もう、これで戦った虚は30体を越えてるだろう。ウルルの霊圧も、消耗してるのが分かる。

早くしねえと、遊子と夏梨が・・・！

「バカヤロー！あのガキ死神、見つけたらしばく！ぜってーしばく！！」

スカした白い横顔、キザな蒼い目。陰でニヤリと笑う口（これは想像）。

俺はそいつに届けとばかりに、無人のパークに向けて大声で怒鳴った。

「隊長つて、酔うと本性でますよねー」

前にそういわれたのを、俺はボンヤリ思い出していた。

「ぐうたらで、やる気なくて、でも腹立つと大爆発する」

それはてめーのことだろ、松本。

俺はいつだって、てめーの数億倍は真面目に仕事してんだろ。今だつて・・・

ちよっと目の前を虚がウロウロしてるのを、観察してんだ。

酔っ払った・・・

空になったビール瓶を後ろに投げ捨て、カウンターに置いてあった新しい一本を手取る。

親指でピン、と蓋を弾き飛ばし、口をつけて一気に呷った。

マズいはずのビールを、なんで何本も何本も空けてるのは、知らない。

クラクラと揺れる頭は、それでも、その場で暴れる見知った霊圧を追う。

あの霊圧は・・・浦原商店で会ったガキどもと、黒崎一護の双子の妹だ。

このタイミング、おそらく浦原に騙されて、ここまで来てしまったんだろう。

敵を騙すには、まず味方から・・・か。浦原喜助、侮れねえ男だ。

黒崎の妹たちの気配が、恐ろしい勢いで遠のいていくのを、俺は頭で追った。

追わなきゃ・・・

アタマでは分かっている。でも体が一向に追っかけない。

人力で移動しているはずがない。チラリと、双子の姉のほうの、勝気な目を思い出した。

ダン、と音を立てて、ビール瓶をカウンターに置く。そして、外に目をやった。

店先を、ジェットコースターが走り抜けてゆく。

それに楽しげに、虚がつかまつてるのを俺の目は捉えた。

世も末だな。

そう思う。まあ、人様に迷惑かけてるわけじゃねえし。というか、人もいねえし。

その時、ドカン、と道の一角が崩され・・・異物が、弾丸のような勢いで、飛び出してきた。

レジャーなひと時を乱された、虚の皆さんがお怒りだ・・・

「こらあ！このクソ死神！こんなトコで何ボサツとしてんだー！」
額に青筋立てて、一直線にこっちにむかって走ってくるのは、浦原商店にいた、赤タマネギみてえな頭のカギだ。

「なんだ、うるせえな・・・」

コイツのことなんて、どうだっていいんだ。

俺は、スツールに腰掛けたまま、バリバリと頭をかいて、そいつを見た。

「なんでこんな事態に、そんなローテンションなんだ、てめーは！」
バン！と店の柱を叩いて、カギがこっちへ入ろうとしたときだった。その胸を、後ろから伸びてきた虚の手が、驚づかみにするのが見えた。

黒い布みてえなのを全身に被り、その顔は白い仮面。

目はうつろにぼっかりと開く、異形の虚。

あれは・・・大虚！

「なんだ、このカオナシみてえなヤツは！」

俺が思うとほぼ同時に、カギは別の名前を叫んだ。

「カオナシってなんだ？」

俺は、空に掲げられていくガキを見上げて、純粹な興味から聞いた。スツールから滑り降り、フラフラしながら、店の入り口に辿り着いた。

「この野郎！」

ガキは、大虚に向かってバットを振り回そうとしていたが、絶対に当たるわけねえ。

大虚の口から、光が漏れ出る。

虚閃を打つ気か！

「避難するか」

よっこいしょ、と背を向けた俺に、ガキが声にならない悲鳴を投げつける。

「てんめえ・・・！」

うるせえ。俺が酔ってる時にピンチになる、お前の運が悪いんだ。

そう思った瞬間。何か空を切る音が、耳に鋭く響いた。

「死ねばもろともだぜ！」

妙に男らしい言葉に振り返ると、俺はありえないものを見た。

あのガキ、俺にバット投げやがった！

避けるのも面倒くせえ、と思った、直後。

ブンブン回りながら飛んできたバットが、俺の頭を直撃した。

「・・・」

ガキが、大虚が、俺が。沈黙する。

「こんの・・・」

イラッとした、ただそれだけなんだが。

コントロールできない暴力的な力が、ぞわり、と俺の中で膨れ上がる。

「クソ野郎どもが！！！！！」

叫んだ途端、俺の中で霊圧が暴発する。

バキバキと地面に罅が入り、店の柱が、天井が、あっという間に崩れ落ちた。

今まさに虚閃を放とうとしていた大虚も予定を変更したらしく、発射しようとした口もそのままに吹っ飛ばされてゆく。

「うおおお!!」

聞こえた悲鳴に、俺はふと、我に返った。

- - - - -

酔ってやる気のない日番谷君の回、終了。

10・照準を「夏梨」に取れ

「あ」

あちこちでドンパチやっている霊圧を感じる。

遅まきながら、異空間にアツサリ飲みこまれてしまった、自分達の立場に気づく。

ヤバイ。

一瞬でアタマが冴えてゆく。

「あ」

周りを、見回した。

やたら、見通しがよかった。

爆弾が落ちて、残骸を叩き潰して、更に掃除したかのように、それはきれいな更地になっていた。

・・・

今度は、さあつと血の気が引いた。

「やつちまった!」

隊長としてのノーミス記録も、同時に粉々に吹っ飛ばしたことに気づく。

「おい、ガキ!」

慌てて更地に飛び出して、いきなり前につんのめった。

我に返ったからって言うても、一気に酔いが覚めるわけでもねえらしい。

かすかに霊圧を感じるほうへ歩み寄り、途中で転がっていたバットを拾うと、氷輪丸で傍の岩を押し上げた。

「生きてるか?」

岩の下敷きになってたように見えたが、うまい具合に地面の割れ目にはまり込んでいたせいで、岩の直撃は受けずにすんだようだ。泥と埃にまみれ、気を失ってはいるが、かすり傷程度だ。俺は顔を上げ、他のヤツらの霊圧を探る。黒崎の妹ふたりは、一体何をしているのか、随分霊圧が遠い。草鹿と、もう1人の気配は、それぞれ近い場所にいる。

全員無事か。

そう思った途端、ガバツ、とガキが体を起こした。

「てんめえ！」

いきなり、俺に向かって拳を繰り出してくる。

俺は、とっさに拾ったバットを体の前に翳した。

カーン！

間の抜けた音が響き、ガキは拳を押さえて黙り込んだ。

「言い遅れたが、バット返す」

「うる・・・せえ」

目に涙を浮かべながら、そいつは俺が出したバットを奪い取った。

「ンなことやってる場合じゃねえんだ、遊子と夏梨が、海の上に・・・」

ガシッ、と襟元を引っつかまれる。

「海の上？どういうことだ」

「どうもこうもねえ！言葉通りだってんだ。早くしねえと・・・！」

その拳が、震えそうなくらいきつく握り締められているのを、俺は間近で見た。

全身泥まみれで、よっぱどの数の虚を相手にしたんだろう、よく立ってると思うくらい、その霊圧はボロボロになっていた。

「俺じゃ、アイツらを助けてやれねえんだよ！」

ちくしょう、と呟くと、ガキは立ち上がり、口を引き結んだ。

「おい、花刈ジン太」

「・・・は？」

フルネームを俺が知ってたのがよっぽど意外だったのか、ジン太はぼかんとした目でこちらを見た。

「何寝ぼけたこと言ってるやがる。お前も来るんだよ」

「けど俺じゃ、力が・・・」

「足手まといなのは、力がねえヤツじゃねえ。意思がねえヤツだ」別に同情して言ってるわけじゃねえ。事実だ。

間拔けな顔が、一気に引き締まる。

「おう！」

もう少し、持ちこたえろよ。

黒崎と同じ、強気な瞳を持つ、意思の強かった、あの女。

照準は、黒崎夏梨。

俺はアイツの居場所を感じ取ると、同時に駆け出した。

「ちつくしょう！」

暴走する水上バイクのハンドルを握り締め、あたしは叫んだ。

メーターは、時速80キロを指している。

車の中なら、特に何も感じない速さだが、直接顔に当たる風は、暴力的に痛い。

後ろの席に座り、あたしの胸にきつく腕を回した遊子は、言葉もなく全身を震わせてた。

まず、この暴れ馬みたいな力の水上バイクを抑え込むには、あたしには重さも力も足りない。

いつ横転してもおかしくないけど、スピードを落すわけにはいいかない。

もし、スピード落そうもんなら・・・

あたしは、そこで考えを強引に断ち切った。

水上バイクの両側にあがった水しぶきの向こうで、虚たちの姿が見える。

いくらスピードを上げて、こいつらは諦めもせず、あたし達の後ろを追いかけてくるのだ。

その数は、段々増えて、今は10体以上になっている。

振り返ったあたしと、先頭を追う虚のうつろな目が、一瞬、交差し
た。

にやり。

その口角が、笑みの形にあがる。

笑ってやがる・・・

こいつら。わざとギリギリの速度で追いかけて、遊んでやがる。

ギリ、とアタシは唇を噛んで、前に視線を戻した。

どうすんだ・・・

ハンドルを支える両手は、もう限界を超えて感覚もねえ。

このままじゃ、遠からずコントロールから完全に離れる。

「夏梨ちゃん、夏梨ちゃん!!」

遊子の悲鳴に、あたしは振り返る。

その視界に移ったのは、巨大な拳を振り下ろそうと迫る、虚の姿だ
った。

拳の先は・・・あたし。

やられる!

そう思った、瞬間。

あたしの頭に、ヒラリとイメージが舞い込んできた。

前にも、同じように虚に襲われて、拳の一撃を受けそうになったと
きのこと。

バサリ、とあたしの前で翻った、黒い着物。白い隊首羽織。
拳を軽々と受け止めた、蒼く白く輝く刀身。
感情を微塵も動かしてない、白い横顔。

「負けて・・・たまるか！」

もう一度、アイツに会った。コントロールを失いそうになった心を、ぐいと引き戻す。

叫んだあたしの頬を、やけに冷たい風が掠めた。

この、気配。

「・・・氷雨」

この、声。あたしは、間違えない。

「冬獅郎!!」

叫んだあたしの目前で、あたしを狙った拳の真ん中に、巨大な氷の柱が突き立った。

11・ 銀の龍の背に乗って

「グオオオオ！」

虚が獣の叫びを漏らして、後ろにのけぞった。

その倒れた虚の後ろから・・・巨大な氷の柱が、立ち上がったように見えた。

でもそれは、生き物のようにうねり、銀色にキラキラと輝きながら、あたし達に向かって突進してきた。

「龍・・・氷の」

あたしは、呆然として呟いてた。

頭から尾まで、30メートルはありそうな、馬鹿でかい氷の龍が。空に向かって、その巨大な口を開いて、吼えた。

ごう、と地響きみたいな音が響いて、ビリビリと鼓膜を震わせる。

「夏梨！遊子！」

その咆哮の合間に、あたしはジン太の叫びを聞き取った。

龍が、あたしたちに並んだ瞬間。

風にあおられ、バサツと翻った漆黒の着物に、あたしの視線はクギ付けになる。

「日番谷くん、ジン太くん！！」

ぱあっ、と遊子の声の調子が明るくなる。

龍の頭に乗っていたのは、いつの間に手を組んだのか、冬獅郎とジン太の二人だった。

冬獅郎は角を左手で掴み、右手で刀を握っていた。その冬獅郎の肩をジン太が掴んでいる。

「やっと追いついたぜ！」

どれだけ戦ったんだろう、傷だらけの顔で、ジン太がニヤリと笑っ

た。

あたしたちに向かつて手を差し伸べようとしたが、届かない。

「寄せろ、冬獅郎！」

「分かつてる！」

冬獅郎が叫び返すと同時に、少しずつ、氷の龍が水上バイクに近寄った。

それと同時に、冷気があたりを覆うのを感じた。

「つかまれ！」

ジン太が、あいた手をもう一度、あたしたちに差し伸ばした。龍に乗り移れってのか？

「遊子、行け！」

あたしは、ハンドルをきつく握ったまま、後ろの遊子に呼びかけた。
「う、うん！」

遊子が、グイ、と目に浮かんだ涙を拭って、手をジン太に指し伸ばした。

でも、風圧でその手は後ろに流れてしまう。

「も・・・もうちょっと！」

ジン太が、歯を食いしばって、遊子に手を伸ばす。
ズルッ、とその足が、龍の背から滑り落ちた。

「危ねえ・・・」

冬獅郎が、とつさに刀を放し、龍から放り出されそうになったジン太の手を捕まえる。

「よっしゃあ！」

しかし、そんなことも頓着しないみたいに、ジン太は声を上げた。
そのジン太の手は、しっかりと遊子の手を握り締めていた。

「でも！刀が・・・」

あたしは叫ぶ。カラン、と音を立てて龍の背を滑った刀が、海に飲

み込まれるのを見たから。

「いいから。引き上げるぞ！」

冬獅郎の腕に力が籠るのが、着物の上からでも分かった。

この風圧の中、片手でジン太と遊子の体を引き上げるなんて、カンタンなことじゃないはずだ。

でも、冬獅郎はちよつと眉間にシワを寄せるだけで、それをやってのけた。

「よし！」

ジン太が、龍の角に腕をかける。遊子も、龍の頭の上にうまくおさまった。

それを見て、ほっ、としなかったと言ったら、それは嘘だ。

追ってくる虚のことも、暴走しまくる水上バイクのことも、その瞬間頭から消えていた。

ズルツ、とあたしの手が、ハンドルから滑った。

途端に、コントロールを失ったハンドルが、ガクン、と左に曲がった。

慌てて握りなおしたが、もう遅い。

「あっ！」

起こった波にあおられて、水上バイクが海上に跳ね上がった。

「夏梨！」

「夏梨ちゃん！」

ヤバイ。

そう思ったと同時に、遊子とジン太の悲鳴があたしの鼓膜を叩いた。思わず目をつぶった、一瞬。

あたしの手の上から、同じくらいの大きさの手が、強くハンドルを握りこんだ。

「えっ……」

目を開けたあたしと、蒼碧の瞳が、思いがけないくらい近い……

15センチくらいの距離で交錯した。

「冬獅郎！」

「大丈夫だ。つかまってる」

あたしの叫びとは裏腹に、返されたのは、ハラが立つくらい冷静な声。

冬獅郎は、あの刹那の間に、あたしとハンドルの間に、体を滑り込ませていた。

ハンドルに背を向け、あたしのいる前部座席に片足をかけて、器用にバランスを取っていた。

後ろ向けの体勢のまま、その左手はハンドルをがっちりと掴んでる。

「どうやって運転するんだろうな、これ」

「少なくとも後ろ向き運転は間違ってるぞ！」

「いいからつかまれ、女！」

冬獅郎は叫ぶや否や、左手に力をこめ、バイクの方向を強引に右に変えた。

「だから！あたしは夏梨だって・・・！」

抗議しかけたあたしは、前のめりに倒れ、冬獅郎の胸にしがみついた。あたし達の体の横を、虚の腕が通り抜けた。

もし水上バイクが右にそれてなかったら、直撃するところだった。

サッ、とあたしの背筋が寒くなる。

ざばっ、と水しぶきを立てて、バイクが水上に着地した。

冬獅郎の左腕に力がこもり、強引にハンドルを切り前に走り出す。体重はあたしよりも軽いくらいだろうけど、力は何倍もあるらしい。水上バイクは、嘘みたいにコントロールを取り戻し、順調に海上を走り出していた。

「虚が来てるぞ！」

ホッとする間もなく、ジン太が叫ぶ。

振り返ろうとしたあたしに、冬獅郎の声が飛んだ。

「前見てろ。虚は俺に任せろ」

確かに、この体勢じゃ、冬獅郎は前が見えないけど、虚は見える。

あたしが振り返ったら、方向を見るやつがいなくなってしまう。

「うん！」

あたしは頷くと、右のハンドルをぐっと握り締めた。

- - - - -

ぎーんの龍の、背に、乗って

ていう歌（演歌？）があつたような。

12・君の名は

冬獅郎は、空いた右手を、虚のほうに向けた。

その腕の周りに、冷たい空気が集まっていく・・・

そう思った時には、その腕をぐるりと取り囲むように、銀色に光る刃が何本も現れた。

「氷殺陣」

冬獅郎の低い声が、耳もとで聞こえた。

それと同時に、その刃が冬獅郎の腕を離れ、意思を持ったものみたいに、まっすぐに虚に向かった。

「グオオ！！」

刃に首を、頭を打ちぬかれた虚たちが、鼓膜がビリビリ痛いくらいの叫びを上げた。

「よっしゃ！！」

ジン太の声が聞こえ・・・あたしは、肩越しに一瞬だけ、振り返った。

あたしたちを追い詰めまくった虚の群れが、まるで影みたいに消えるのを見た。

それを、眉一つ動かさず見つめる、冬獅郎の顔は・・・

その場にいる誰と比べても、格が違って見えた。

でも、それって・・・

「これだけで終わるとは、思わねえけどな」

冬獅郎はあたしを見返してそう言うのと、右手を、バイクの両側に上がっている水しぶきの中に差し入れた。

その手の先が、青白い光に包まれた、と思ったとき。冬獅郎はその手を引き抜く。

水の中から現れた時には、その手は、一振りの刀を握ってた。

その刀身は、水みたいに一瞬ゆらめいたけど、すぐに強固なものに変わる。

それは、さっき、ジン太を助けるために取り落とした、あの刀と外見が全く同じだった。

「『氷輪丸』は、水で出来てる。

水さえあれば、形を変えることも、復活させることも自由自在だ」
あたしの疑問を感じたのか、冬獅郎が淡々と言った。

「んなことより、随分来ちまった。遊園地に戻るぞ」

「お前らもこつち、乗り移れよ」

ジン太が、あたしたちに手を指し伸ばした、途端。

あたしたちの前方100メートルくらいの海上が、いきなり爆発した。

「今度は前かよ！」

ジン太が怒鳴った。

「また大虚か」

チラリ、と振り返った冬獅郎が呟く。

「このまま行ったら、バケモノに当たっちゃうよ！」

遊子が水上バイクと、虚を見比べて叫んだ。

「避ける時間ねえぞ！」

その通り。

ジン太が叫んだときには、避けられないほど近い距離に、大虚の姿が迫ってた。

「お前、ちよつとの間自分で運転してる。俺がカタをつける」

「イヤだ」

前の虚を見据えていた冬獅郎が、こちらに顔を向ける。

その眉が、怪訝そうにしかめられた。

「あたしも一緒に戦う」

「お前、力なくせに・・・」

「力があるとか、ないとか、関係ねーだろ!!」

あたしは、冬獅郎の呆れたような言葉を遮った。

「あたしは力が無いから、力があるお前を助けちゃおかしいのか？
お前は死神だから、人間のあたしには、無事だっことも伝えねえ
のかよ！」

ずっと、この言葉を言ってやりたかったんだ。

あたしが冬に会った時の冬獅郎は、あたしからも、一兄からも、恐
らく他の仲間からも離れて、一人で巨大な何かと戦っていた。

誰の助けも拒み、背中を向けた冬獅郎の横顔は、強くて、冷たくて・
・そして、辛そうだった。

見ていて、その痛みがあたしにも伝染ったかのように、胸がジンと
痛くなった。

こいつ、本当は痛いくせに、自分が痛いつてことにすら、気づいて
ないんだ。

それを見て思ったんだ。

冬獅郎が死神だろうが、強かろうが関係ない。

「あんたはあたしのダチなんだ。1人で戦わせたりしねーよ」

その言葉で、あたしが言いたかったことを、冬獅郎が感じ取ったか
は、分からない。

相も変わらず、腹が立つような仏頂面のままだったから。

「おい、女」

「夏梨だっつつてんだろ」

あたしと、冬獅郎は、つかの間視線を交わした。

「で？どーすんだ」

ちらり、と冬獅郎は、虚のほつを見やった。

どーすんだ、と悠長に言ってる場合じゃないのは、振り向いた瞬間
わかった。

もう20メートルもねえ！

縮み上がったた心臓が、今度は興奮でどんどん高まるのが自分でも
分かった。

やってやる。絶対、やってやるんだ。

「このまま行く！とびきりの一撃、食らわせてやる」

「オイ、それじゃ・・・」

「方向を決めるのはあたしだ！」

そう、言い放ってやると。

ちよっとだけ切れ長の目を見開いたアイツは、ニヤリ、と笑って見
せた。

「勝手にしろ」

そういつて、スラリと「氷輪丸」を鞘から抜き放った。

「行つくぞー！！」

最後の力を振り絞って、ハンドルを下へぐい、と引いて重心を後ろ
に引いた。

ただでさえ軽い体重で、浮き上がりがちだったところだ。

水上バイクは、斜め上に進路を変え、空中へと飛び上がった。

進路の先は、狙ったとおり、大虚！

「食らえ！」

大虚の真っ黒い垂れ幕みたいな胴体に、水上バイクのとがった先が
食い込んだ。

後ろへよろり、と倒れこみそうになった大虚の眉間に、冬獅郎が振
るった刀が深く、深く食い込んだ。

その姿が一瞬光ったように見えて・・・大虚は、その質感が嘘みた
いに、スウツ、とその場から消えた。

「やった・・・あれっ？」

あたしの体が、暴風にあおられる。
水上バイクが、激しい勢いで海面に叩きつけられたのを、視界の隅に捕らえた。

しまった！

着地のことまで、ぶっちゃけ考えてなかった。

ギョツと目をつぶったとき、肩をふわりとした感触が包んだ。

「詰めがあめーんだよ、夏梨」

その蒼碧の瞳が、ほんの少しだけ、悪戯っぽく見えた。

ギクリとしたのか、ドキリとしたのか、分からない。

それが、初めて名前を呼ばれたからだ・・・と思ったときには、あたしの肩を抱えた冬獅郎は、視線を氷の龍に向けていた。

13・ 目指せゲームオーバー

「氷輪丸！」

その龍に向かつて、冬獅郎が叫ぶと。龍は、あたし達に向かつてぐいん、と方向転換した。

その角をつかんで、冬獅郎が頭に着地する。

「え？」

周りを見回した冬獅郎が、初めて、驚いたみたいな呟きを漏らした。
「なんだよ？」

ジン太も、立ち上がってあたりを見回す。

水上バイクは、海の中に沈んで跡形も無い。

動きを止めた氷龍の上で改めて見渡すと、周りはシンと静まり返っていた。

途端。

周りの景色が、さっきの虚みたいにな、スウツと消えていく。

「なんだ・・・！」

あたし達が叫ぶのとほぼ同時に、辺りは真っ白な光に包まれた。

「戻ってきたみたいだね」

まぶしさに目を閉じたあたし達が、初めに聞いたのは、思いがけずやちるちゃんの声だった。

「なんだ？」

目を開けたあたしが見たのは。何だか懐かしい気さえする、遊園地の風景だった。

ジェットコースターのレールの上に、やちるちゃんが座って、あたしたちを見つめてた。

見下ろせば、同じく無人の通りや、街並み、屋台が見える。

戻ってきたのか・・・

あたしたちの乗った氷龍は、さつきまで海上にいたのが嘘みたいに、遊園地の上空まで移動してた。

「そういうことか」

その声に振り返ると、冬獅郎は片手を龍の角にかけたまま、遊園地の風景に目をやっていた。

冬獅郎の隣に立って、同じように周りを見渡してみる。

「霧・・・？」

300メートルほど先からは、白い霧みたいなものに囲まれて、見えなくなってた。

さつきまでは、普通に青天だったはずなのに・・・

「霧じゃねえな」

あたしの言葉に、冬獅郎は視線をこちらに向けた。

「あの霧の向こう、何も気配を感じねえ。異空間が、随分小さくなってるみたいだな」

「え？」

「下りるぞ」

冬獅郎がそう言つと、龍はあたしたちを乗せたまま、ゆっくりと地面に降り始めた。

地面にその胴体がついたと思った瞬間、ふっ・・・とその姿が消える。

トン、と地面に初めに下りた冬獅郎の体が、ふら、と一瞬よろめいたのを、あたしは目の端に捉えた。

「無理したねー、ひつつん。そんな長い間、龍を具現化させるなん

て」

レールに座ったまま、やちるちゃんが冬獅郎を見下ろした。
そうなのか？

あたしは、冬獅郎の白い横顔を見る。

「うるせーな。てめーが酒飲ますから、ふらついただけだ」

ガシガシと頭をかくと、その銀色の髪の手から、水が滴った。
それを見て、あたしも、全身ずぶ濡れなことに気づいた。

さっきまでは必死で全然気がつかなかったけど、はつきり言って・
・かなり、寒い。

「おい、ウルルは？」

ジン太が慌てて辺りを見回した。同時に、

「はーい・・・」

どこか申し訳なさそうな、いつもどおりのウルルの声が聞こえて、
あたし達は振り返る。

「ていうか、なんでポップコーンまだ食べてんだ！」

「だって・・・戦ったら、オナカすいたんだもの」

恐るべし。ちよつと服が埃で汚れてるけど、全く傷一つついていない。

「なんでてめーは、怪我ひとつしてねーんだよー!!」

「痛い、痛いよジン太くん・・・」

ズバズバと歩み寄ったジン太に、こめかみを両方からグリグリされて、ウルルは悲鳴をあげてる。

「日番谷、くん」

遊子が冬獅郎に、歩み寄った。

文字通り地に足がついて、ようやく落ち着きを取り戻したんだろう。
ちよつとこいつも、休ませてやらねーと。

・・・？

ズン、と遊子が冬獅郎に顔をつきつけた。

「久しぶり！ねえねえ、どこにいたの今まで？どれくらいいられるの??」

機関銃のような勢いに、冬獅郎が一步、さがった。

立ち直りはえー・・・

いつになったら戻れるの?とか。虚はもういないの?とか、そういう疑問はナシかよ。

「現世に戻るまでだ」

のけぞりつつ答えた冬獅郎の言葉に、

「じゃ、ここに住んでもいいな」

目をハートマークにして続ける、遊子。

「それは困る」

冬獅郎とあたしは同時に、突っ込んだ。

「ンなことより。なんで海が急に消えちゃったんだ?」

遊子を押しのけ、あたしは冬獅郎に尋ねた。

「海にいた虚が、一匹もいなくなっただから、みたいだぜ」

「え?それってどういう・・・」

「虚を倒してたらね、途中から、どんどん遊園地が狭くなっちゃったの」

あたしの疑問に答えたのは、レールに腰掛けたやちるちゃんだった。

「ここから出る方法は多分、単純だ。中にいる虚を、全部倒せばゲームオーバーのはずだ」

「て、ことは」

あたしは、静まり返った遊園地の中を見渡した。

「まだ、あんなバケモノがいるの?」

さすがに、それを聞いた遊子が、不安げな顔であたりを見回した。

「大丈夫だ」

特に遊子の表情を見たわけでもないのに、冬獅郎はコイツにしては優しい声を返した。

「絶対、まも・・・」

「ジン太スペシャルラリアット!!」

遊子と冬獅郎が見詰め合おうとした、その瞬間。

いつの間にか戻ってきたのか、ジン太が冬獅郎の頭に向かって「飛び蹴り」を仕掛けた。

ラリアットは飛び蹴りじゃねえだろ!

「ラリアットはこうだよ!!」

あたしが突っ込みを入れる前に、ひゅん、とやちるちゃんが冬獅郎とジン太の間に割ってはいる。

そのまま、ゴン!!とやちるちゃんの肘が、ジン太の頭に見事に決まった。

吹っ飛ぶジン太を残して、やちるちゃんはふわり、とまたレールの上に戻る。

「・・・何か面白えのか?」

冬獅郎は、サッパリ分からん、という顔でジン太の、地面に突き立った脚を見つめた。

頭が地面にめり込んでから、そこしか見るところがないんだが。

「いーんだ。気にすんな。それより虚は?」

こういうことに激しく疎いらしい冬獅郎に事情を説明しないのは、あたしの情けだ。

「あっちだよ!おっきいのがいるよ」

レールに座ったままのやちるちゃんが、北の方を指差した。

14・ラスボス、現る

「何か、レンガの建物が見える」

「バックドラフトじゃない？」

遊子が、ポケットから地図を取り出して、言った。

「炎のアトラクションだって！」

えーと、バックドラフトとは、家の中が焼き尽くされた火事するとき、戸をあけた瞬間に、炎が噴出してくる現象のことを言ってる」

「でも、この状況じゃ、その情報いらなくねえか？」

あたしは、そうだったが、冬獅郎は遊子の解説に、顔を曇らせた。

「炎熱系の力つてのは、当たり前みたいだな。それに、虚じゃねえ」

「虚じゃねえって・・・」

「虚より強い。破面だな、きっと。十刃よりは下だろうが・・・おい、草鹿」

「残らないよ、あたし。ひつつんと行く」

冬獅郎が言い終わる前に、やちるちゃんはそう言った。

「オイ」

レールの上を見上げたときには、ふわり、と体重が無いみたいに身軽に、やちるちゃんは下に飛び降りていた。

「うおっ？」

そのままがつし、と冬獅郎の頭に飛び乗った。その重さで、冬獅郎がよろめく。

「重いだろ、草鹿！下りろ」

「重いなんて、いっつもは言わないのに」

やちるちゃんが、口を尖らせて言うと、地面に降り立った。ぐっ、と冬獅郎が詰まる。

「そんなへ口へ口じゃ、1人でいったってだめだよ、ひつつん」

無邪気な子供にしか見えないやちるちゃんが、あの冬獅郎を説得してる。

「俺たちも行くからな！」

「遠足じゃねーんだぞ！」

冬獅郎が目を剥いてジン太に言い返した。

「でも、しぶきで濡れちゃったから乾かしたい・・・」

ウルル・・・お前が天然だってことはよく分かったよ。

でも・・・これから、もう一体も虚が現れないなんて保証は、どこにもないんだ。

不本意だけど、疲れ果てたあたし達だけが残されたら、虚をどこまで撃退できるか分からない。

冬獅郎も、すぐにその結論に辿り着いたんだろうと思う。

ふう、とため息をつくのが聞こえた。

「どいつもこいつも・・・勝手にしろ」

そいつって、あたし達に背を向けて、バックドラフトの建物に向かって歩き出した。

もちろん、あたし達も後に続いた。

無人のまま、楽しげに回り続けるメリー・ゴーランドを横切って、あたしたちはバックドラフトの前に立った。

立った途端、ぎい・・・と嫌な音を立てて、その巨大な扉がぱっくりと口を開けた。

あたし達は、そのあまりのタイミングのよさに、顔を見合わせる。

「入るぞ」

冬獅郎は先に立ち、真っ暗に見える建物の中に足を踏み入れた。やちるちゃんが、少し遅れてそれに続く。

あたし達が全員建物の中に入りきったとき、ボタン、と背後の扉が勝手に閉まった。

部屋の中は、うす赤い光に照らされてた。

映画のシーンを切り取った、消防車や部屋の中のレプリカが見えた。部屋の奥には、次の部屋への扉がぼんやりと見て取れた。

全く動揺した風もなく、死神のふたりは、足を進めた。

「炎のアトラクション、バックドラフトへようこそ」

男にしてはちよつと高めの声が、その暗闇の中に響く。

ナレーションを聞いている場合じゃねえんだ。

あたし達は、いづどこから攻めてくるか分からない破面に、体をこわばらせた。

ナレーションは、楽しげに続く。

「バックドラフトとは、扉を開けると同時に、急激に送り込まれる酸素によって、爆発的に炎が燃え上がる現象です。

この建物内はいくつかの部屋がありますが、どれかの扉をあけると同時に炎が噴出す、興奮の――」

「オイ」

冬獅郎が、そのナレーションを遮って、振り返った。

「遊園地ってのは、そんな危険な遊びをやるのか？」

ぶる、と遊子が首を振った。

当たり前だ。扉を開けた瞬間炎が噴出したりしたら、死ぬだろ。

「これ、そういうアトラクションじゃないよ・・・」

「お前、破面だな」

冬獅郎が、次の部屋への扉へ歩み寄りながら、天井を見上げた。

15・ 炎の破面 VS 氷の死神

それに返したのは・・・ゲラゲラと笑う、悪意の籠った声。

「霊圧をありつたけこめた炎ですので、並の反撃では無意味です。ご注意ください・・・」

冬獅郎が、次の部屋へのドアに手をかけた。

ゴクリ、と誰かが息を飲みこんだ。

「・・・」

「オイ、冬獅郎、あけるなら早く開けるよ！」

手をかけたままの冬獅郎の背中に、ジン太が声をかけた。

確かに。勿体ぶられるより、一気に開けてくれたほうが気が楽だ。

冬獅郎は、あたし達をチラリと振り向き、部屋の一角を指差した。

「怖いやつは、そこから出てる」

そこにあつたのは、「緊急避難路」。

「怖くなったり、体調が悪くなったら、無理しないでここから出たね」とピンクの丸文字で書いてある。

「このやろー、バカにすんな！」

ズカズカとジン太が扉に歩み寄る。

「あ、バカ・・・」

冬獅郎が止めるより早く、ジン太は扉をガツ！と押し開けた。

部屋の向こうは、前の部屋とほとんど変わらない内装だ。

「ホラ！大丈夫・・・」

ジン太は振り返り・・・後ろに誰もいないのを見て、ギョツと目を見開いた。

「てめーら、人に開けさしといて逃げんなー！」

20メートルくらい一気に跳び下がったあたしたちを見て、オイ、

と突っ込みを入れる。

「お前が勝手に開けたんだろ。1人で吹っ飛べ」

「てめえ、それでも死神か！人を助けるのがてめーらの仕事だろ？」

「違う」

心外だ、とでも言いそうな顔で、冬獅郎はジン太を見返した。

「人の魂をあの手へ導くのが仕事だ。お前が死んだら、本来の仕事をしやるから、心配するな」

「今ので、余計心配になったわ！」

ジン太は、肩を怒らせて先へ行く。

それについていく冬獅郎の顔を、あたしは見やる。

「オイ。お前、意外と機嫌いいだろ？」

表情は、相変わらずの仏頂面だ。でも、いつもよりは口数が多いような気がする。

「現世の遊園地って、けっこう楽しいねー！」

あたし達の隣を、ばーんと弾むように歩きながら、やちるちゃんと言った。

イヤ、全然、遊園地ってこんなじゃないから。

あたしは突っ込みを入れたけど、もしかしたら冬獅郎も、案外楽しんでるのかもしれない。

まあ、楽しいけどよ。

これで、命の保障があるならな。

「度胸のある、チャレンジャー達に、一つ情報を上げましょう」

イヤミな調子のナレーションが、また聞こえた。

「これは、バックドラフト・サービスバージョン。

炎が噴出した後、雷も同時につけましょう」

ハンバーガーにピクルスをつけましょう、ていう位の軽い口調で、続ける。

ピクリ、と冬獅郎の眉が動く。

「氷で炎を防いだとしても、次の一撃を防ぐことはできませんので、ご注意ください」

その声は、明らかに笑いを含んだ。本当にハラが立つバケモノだ。

「オイ、どーすんだよ？」

不安げな顔を見せたジン太の隣を、冬獅郎は通り過ぎた。

そして、一気に次の部屋への扉を押し開ける。

「お前らは心配すんな。さっさと終わらせる」

コツ、コツ、と、あたし達の靴音だけが、赤っぽい部屋の中にこだました。

そして・・・その次の扉に、冬獅郎は手を置いた。

「そこだよ」

それと同時に・・・やちるちゃんが、呟いた。

「ああ」

冬獅郎は、その扉に手を置いたまま、中の気配を推し量るみたいに、固まっている。

やちるちゃんが、その隣までやってきて、足を止めた。

見下ろした冬獅郎と、逆に見上げたやちるちゃんの視線が、空中でぶつかる。

「また『俺はひとりでやる』・・・とか、言うの？ひつつん」

眉間にシワを盛大に寄せて、やちるちゃんが冬獅郎の口真似をする。ため息をついた冬獅郎は、ちらりと、ほんの一瞬・・・あたしを見た。

「二撃目は防げねえんだってよ、草鹿」

「ラクシヨーだよ」

やちるちゃんは、にこーつと微笑んだ。

そして懷から、小さな棒みたいなものを取り出した。

それを、薄暗い部屋の中で一振りすると・・・それがあつという間

に大きくなり、ひと振りの刀に姿を変えた。
やちるちゃんの身長くらいある、大きな刀だ。

「お前らは下がれ」

冬獅郎はそう言つと、やや置いて・・・一気に、扉を押し開けた。
瞬間。

目も開けていられないほどのオレンジが、あたしの視界に飛び込んできた。

炎・・・！

それはまさに、「目に飛び込む」という言い方がピッタリの、速度で。

避けるとか、防ぐとか、そういうレベルじゃねえ！！

部屋が、炎にあつという間に飲まれる、と思つた瞬間。

冬獅郎が、バン、と地面に右の手のひらを着く姿が、オレンジの光の中で、影のように見えた。

その手のひらから、青白い光が迸る。

「まぶしっ！！」

逃げる時間なんてない。あたし達は、目をつぶることしかできなかった。

16・やちるの一撃、日番谷の幕引

そして・・・目を開けて。

あたし達は、ぽかんとすることになる。

「・・・え」

部屋の中は、うす赤い光に、包まれていた。

そう。何事もなかったかのように。

「嘘だろ？」

あたし達は、自分の体を確認して、全部ついてることを確認する。
一瞬で火葬されそうだって思ったのに・・・

「互角、だね」

静まり返った部屋の中に、やちるちゃんの声が響いた。

「そうだな」

返した冬獅郎は、地面に手を着いたままだった。

その肩が、喘ぐように大きく一度、揺れる。

「冬獅郎！」

近づこうとしたとき。

「来るな！」

冬獅郎の鋭い声が、あたしの動きを一瞬で止めた。

こんな緊迫した声を、冬獅郎が出すのをあたしは初めて聞いた。

そして・・・冬獅郎の向こうの部屋に佇む、人型の影を、あたしははつきりと見た。

仮面みたいなものを、顔半分に使った男・・・それは、何だかピエロみたいにも見えた。

「一瞬であれだけの炎を押さえ込むとは、お見事。」

「・・・でも残念ながら、互角ではないようですよ」

ニヤリ、と、そいつが笑った。途端。

まばゆい稲妻が、ジグザグに曲がりながらあたし達に迫った。

それは、先頭にいる冬獅郎に、まっすぐに襲い掛かった。

「冬獅郎！」

あたしはとっさに走りより、冬獅郎の前に、割り込もうとした。ギョッ、とした冬獅郎の顔を、あたしは目の端に捉えた。

「伏せるバカ！」

頭に手のひらを乗せられ、そのままぐつと床に押し付けられる。

あたし達の真後ろに佇む影・・・あたしはそれを見上げる。

やちるちゃんが床と平行に構えたのは・・・身長くらいある、日本刀。

稲妻の光を浴び、ギリリと光が渡った。

「やちるちゃ・・・」

叫んだ言葉は。やちるちゃんの刀から発せられた光に、断ち切られた。

それは、まるで光るもう一本の刃が、やちるちゃんの刀から飛び出したみたいに見えた。

雷を裂き、貫いて、まっすぐに破面の元へと向かう。

「何っ・・・？」

破面が叫ぶよりも、早く。

それは、破面の体の真ん中を貫いた。

「くそ・・・」

よるめいた破面が、その場から身を翻そうとしたとき。ヒュッ、と何の前触れもなく現れた影が、破面に迫る。

「ぐっ！」

腹に冬獅郎の足が食い込み、破面の体は壁に縫い付けられる。

「随分、おちよくってくれたもんだ・・・」

改めてみると、その破面は、冬獅郎よりも一回り大きいくらいで、体格はそう変わらない。

壁に縫い付けられた、滑稽なピエロ。

「助けて、見逃してくれ」

冬獅郎はそれには無言で、右足で破面を押さえつけたまま、肩の氷輪丸の柄に手を使った。

「くだらねえ空間作りやがって。後悔するのが遅え」

「ち！違う！違うんだ。この空間は、僕たちが作ったわけじゃないよ！」

「あ？」

冬獅郎は、柄に手を使ったまま、体の動きを止めた。

「既にそこにあった空間に、吸い寄せられただけなんだよ！

誰かを傷つけようなんて思ってたない！」

助かる望みあり、と思ったのか、破面が早口で捲くし立てた。

「・・・ツバ飛ばすんじゃないよ」

冬獅郎が、その言葉と同時に、足を破面から外した。

「お、おい！見逃してやるのかよ！！」

ジン太が慌てて叫んだが、冬獅郎は面白くもなさそうな顔のまま、くるりと破面に背を向けた。

柄に手を使ったまま。

その背後に、破面が飛び掛る。

その爪を、冬獅郎の頭に向かって振り下ろした。

「甘えよ、死神！」

「『誰かを傷つけようなんて思ってたない』と言ったか」

肩越しに、冬獅郎が破面を振り返る。

目にも留まらぬ速さで、刃が鞘走った。

白銀の光が、うす赤い部屋の中でキラリと輝き・・・刹那の間に、部屋は静寂を取り戻す。

コマギレになった破面の体が・・・ふう、とその場から消えた。

「終わったのか」

あたしがそう言った時だった。その場の景色が、ぐにやり、とゆがんだ。

「うわっ！」

「きゃあっ！」

何かつかまるものを、と手を差し伸ばしたとき、周りはまばゆい光に包まれた。

17・黒幕へ、必殺技のプレゼント

カチ、カチ。どこかで聞いたような音が響く。

「来る！来る来る！」

「きゃー！！」

次に聞こえてきた声は・・・あたしたちの声じゃない！

あたしはハッと目を開けた。

そして、自分達が座席に座っていることに気づく。

ここ・・・あのジェットコースターか！！

あたしたちが、異世界に送られる直前にいた場所。

振り返ると、舟の上には満杯の人、人、人。

あたしの前には、遊子とジン太の姿・・・

「戻ってきたんだ！」

あたしは思わず叫ぶ。

濡れていたはずの服も、嘘みたいに乾いていた。

「何だ、ここ？」

冬獅郎の声に、ハッと視線をめぐらせると、ジン太の席の前・・・

ジェットコースターの先頭に、冬獅郎とやちるちゃんの姿が見えた。

黒装束の死神姿で、後ろの風景が透けて見える。

他の客からは、この状態のふたりの姿は見えないはずだ。

「え・・・まさか」

ジン太の情けない叫びがあがる。

カチ、カチ・・・音と共に、あたしたちは上へ、上へと運ばれる。

「また、落ちんのかよお！」

カチ。

音が止まった。

「ん？」

冬獅郎が周りを見回したとき、舟が物凄い勢いで急降下する。怪訝な顔をした冬獅郎が舟から飛び離れようとした瞬間、

「ぎゃあああ！！」

絶叫をあげたジン太が、腕でがっし、と冬獅郎の胴を掴んだ。

「え・・・？」

一切の疑問も、抗議も、さしはさむ余裕もなく。

「うおおおお？」

冬獅郎は、頭から何十メートルも、落ちた。

「イヤ、それはさ」

ズズツ、とストローでジュースを吸い上げながら、ジン太が言った。

「酔っ払ったのは、てめーの自業自得だとしても。

その後無理して霊圧使わしたのは俺達のせいだし。悪いと思ってんだぜ」

「・・・」

ジン太が見つめる先。眉間の、それはそれは深い皺。

「だからよ。」

間違っても、てめーをいきなり、ジェットコースターの頂上から、脳天逆さ落としにするようなつもりは・・・」

「ちよつとでも悪いと思ってんなら・・・」

テーブルに着いた拳が、プルプル震えてる。

ダン！！と、その拳がテーブルを叩いた。

「ゲラゲラ笑うのをやめろ、てめーらあ！！」

「アッハッハ！！」

あたしたちは、（もともと笑ってたが）ついにこらえられなくなり、そっくり返って大爆笑した。

だつて。

天下の死神が。

その中でも、隊長様ともあろうの方が。

ジェットコースターから、逆さ落としの刑を食らったとはいえ。

一瞬とはいえ、気を失ったら、笑うだろ??

「ひつつん、そんな怒ったら、身長伸びないよ?」

「関係ねーだろ!」

ずい、とやちるちゃんが、冬獅郎の手に、並々と紅茶が注がれたティーカップを渡した。

憤懣やるかたなし、という表情で、冬獅郎が動きを止める。

午後の日差しが、ぼかぼかとあたしたちを取り囲んでいた。

死神姿だったふたりも、それぞれジーンズにシャツ、ワンピースの普通の姿になつて。

現世に戻ってきたあたしたちは、カフェの窓際の席に陣取っていた。

「ンなことより。頭打ったついでに、思い出したことがある」

「なんだよ?」

あたしは涙を拭きながら、仏頂面を取り戻した冬獅郎の顔を見やつた。

「つまんねー話だよ。」

ある男が、上から頼まれて、異空間を作る実験をしてるって噂で聞いた

「はっ?」

その場の視線が、冬獅郎に集中する。

「異空間っていうより、そのエリアのレプリカを作っておいて、ホ
ンモノは別の場所に転送するって実験だ」

「オイ、それってひよっとして・・・」

かなり、被ってないか？あたしは絶句した。

あたし達が送り込まれた空間は、全くホンモノと同じ外見を持つ、
確かにレプリカと言ってもいいような代物だった。

「その男って、誰なんだよ？？俺がぶっ飛ばしてやる！」

ジン太が、冬獅郎に詰め寄る。対する冬獅郎は、ハア、と気の無い
返事をする。

「お前ら、誰に言われてこの遊園地に来たんだ？金出してくれたヤ
ツがいただろ」

「ん？ああ」

「俺もまさか、自分が原因で騒動を起こしながら、他のヤツに尻拭
いをさせるような、図々しいヤツがいるとは思わなかったんだよ」

「・・・」

沈黙。

「オトナって、怖いね。ジン太くん・・・」

ウルルがポツンと呟いた。

「・・・復讐だ」

ジン太が、物騒な言葉を吐く。やちるちゃんが目を輝かせた。

「浦原商店をこーげきするの？？」

「おう・・・で、そりゃ俺んちだ！ほかに何かねーのか、何か・・・」

「

ジン太が鞆をこそそそやりだす。

パンフレット、ティッシュ、お菓子、なぜかスーパーボール、その
他訳わかんないものを取り出したジン太が・・・不意に、ニヤリと
笑った。

「これだぜ！」

「おおっ、それは!!！」

あたしたちの声が合わさった。

18・後日談／迷惑がとまらない

「おー、帰ってたのか、夏梨、遊子！」

台所にのっそりと入ってきた一護は、夏梨と遊子の姿を見つけて言った。

高校も小学も、春休みは今日で最後。明日から始業式だ。

一足早く学校に行く用事でもあったのか、一護は高校の制服姿だった。

「ただいまー、おにいちゃん！お土産いっぱいあるよ」

上機嫌の遊子が、台所の上を指してみせる。

「おー、サンキューな」

何気なく袋の中を覗き込んだ一護が、袋の中のものをつまみあげて・
・バツと顔を上げる。

「これ、パッケージに帝都ホテルって書いてあるぞ？すっげー高級ホテルじゃねえか！」

「うん！すごいゴージャスだったよ！

クッキーとかチョコとか、お土産いっぱい買ってきたよ！」

遊子は、邪気の無い顔でにこーっと微笑んで、引きつった一護の顔を見上げた。

「来ちゃった・・・て、どうやってだ？おい、夏梨！」

「いーんだよ、食っちゃえよ、一兄！」

焦る一護の言葉を受け流しながら、夏梨は頬杖を付いて、カレンダーを見やった。

そろそろ、届いてるかな・・・

「まーゆーりん！あ・そ・ぼー！！」

十二番隊舎の入り口では、草鹿やちるが大声を張り上げていた。

「今日は、どのようなご用件でしょう？」

門を開けて現れたのは、副隊長のネムだった。

やちるの姿を見つけると、その場にしゃがみこんで、やちると視線を合わせる。

「うん！ひつつんに頼まれたの！まゆりんにお土産を渡すの！」

ネムは、やちるの右の手のひらに積み重ねられた箱を見やる。

「まあ。それはありが・・・」

言いかけたネムは、しゃがみこんだまま、上を見て・・・彼女には珍しく、言葉をとぎらせた。

「なんだネ。騒々しいネ！これだからガキは嫌いだよ」

ぶつぶつ言いながら、涅マユリが、隊舎の二階の窓を開けた。

「ン？」

目の前に映ったのは、積み上げられた箱・箱・箱。

その先を追うと、地面に立つやちるの手のひらに行き着いた。

「一体・・・何段重ねてるんだヨ！」

曲芸よろしく、何十・・・いや、何百の箱を積み重ねて持ったやちるは、マユリを見て、満面の笑顔で叫んだ。

「まゆりん！！E・の人形焼、買ってきたよ！」

「加減つてものを知らんのかネ！」

「ん？今なんか、涅隊長の声聞こえませんでした？」
十番隊執務室の長椅子に腰掛けた乱菊が、窓の外をチラリと見やっ
た。

「気のせいだろ」

墨を筆に含ませながら、日番谷はパリリ、と書類をめくった。

いつもと違う……

乱菊は、注意深く日番谷の横顔を見やる。

草鹿やちると組んで仕事をした後、日番谷は、大抵機嫌が悪い。

今回は特に、他の誰もが嫌がった仕事を、隊首会で押し付けられた、と聞いていた。

どれほど爆発寸前で帰ってくるか……と、ハラハラ半分、ワクワク半分で待っていたのだが。

その無表情を、じーっ、と見つめる。

今日の隊長は……機嫌が、良いわ！

「何見てんだ松本……」

「え？」

気づけば、10センチくらいの至近距離で、日番谷の顔を見つめていた。

「とつとと席に戻れ！」

一喝され、すぐごと乱菊は席に戻る。

席に戻ってから、日番谷の様子をこっそり伺うと。

笑った！今、絶対笑ってた！

日番谷は、カレンダーを見て、ほんのちょっと上げた口角を、すぐに元に戻した。

「いや、全く」

浦原商店の縁側で、浦原は夜一と並んで座っていた。

並んで……といっても、今日の夜一は黒猫の姿である。

「お主……ほんつつつとくに、悪だのう」

「とーんでもない」

浦原は、こんな時でも取らない帽子の鏢の奥から、目をキーンと光らせた。

「レプリカ空間を作り出したらどうなるか？ていう実験も出来たし。あの子たちも遊園地で楽しめたし。言うことなしじゃないですか」

「・・・そのセリフ、日番谷冬獅郎に聞かれたら、この商店なんぞ氷漬けにされるぞ」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。そうなたらジン太とウルルが止めてくれますから」

ひ・・・ひどすぎる。

夜一は、古い付き合いのこの友人との関係も、見直し時かもしれない・・・と、浦原の顔を眺めた。

ホンモノそつくりの擬似空間を作り出し、ホンモノの空間は、ソウル・ソサエティに転送してしまう。

それは、藍染に狙われている空座町を護るための大切な切り札だ。

しかし、実験の過程で、霊魂が集まりやすい場所に、次々と異空間が生まれてしまったのは、絶対ただの誤算だと思う。

気の毒なのは、こんな尻拭いに駆り出された死神か・・・

「異空間」を作り出したのが藍染でも破面でもなく、ここにいる浦原だと知ったら、どんな顔をするのか。

そう思ったとき、

「店長！」

ジン太の声が聞こえて、夜一は言葉を止めた。

「手紙来てんぞ、店長に」

エプロン姿で入ってきたジン太は、縁側にポイ、と封書を置くと、すぐに駆け足で店先へと戻った。

「おや。クレジットカードの支払いですね。」

今月は、あの遊園地の支払いでちよつと多いかも・・・」

そう言つて、封を切つて中を取り出した浦原は・・・

「どうした、浦原」

しきりに目をしばたかせている浦原を見て、夜一は後ろから支払い明細を覗き込んだ。

「・・・ゼロがいつもより2個ほど多いんですけど。気のせいですかね」

「・・・浦原。お主、やられたぞ」

「くう・・・っ、世知辛いマネをしてくれますね・・・」

痛恨の一撃。

うめく浦原を見て、廊下に潜んでいたジン太とウルルは、同時にぐっ、と拳を握り締めた。

しかし、二人は知らない。

二人はもちろん、遊子も夏梨も、日番谷もやちるも、知らない。

浦原の懷に、今度は「イズニード」のチケットが6枚、忍ばされていたことを。

bleach in wonderland fin?

- - - - -

あまりに展開が見え透いているため、
続きはきつと、ないでしょう・・・

お粗末さまでしたm()m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845d/>

BLEACH in WONDERLAND

2010年10月10日14時43分発行